

東アジア仏教における韓国仏教の位相

洪 潤 植

The Status of Korean Buddhism within East Asian Buddhism

Yoon-Sik HONG

Abstract

The purpose of this paper is to examine the status of Korean Buddhism within East Asian Buddhism. In the information era of the 21st century, the role of Buddhism has become more important as ‘-Dependent Origination-’ emerges as a concrete and realistic alternative to overcome conflict. Korean Buddhism initially imitated the Chinese tradition; however, this imitation was external not internal. Korean Buddhism developed its unique form due to social and political circumstances. Wonhyo insisted upon Tongbulgyo, the harmony of Buddhist thought and doctrine in Sipmunhwajaeng, by reconciling various sects and promoting a belief in the pure land. This eventually led to the birth of five doctrinal sects and nine meditative sects. Baekje greatly influenced the development of Japanese Buddhism, while -Korean Buddhism came to include such article of faith as the mandala of Japanese Buddhism. This is seen clearly in Buddhist paintings based on the Avatamsaka Sutra. The Korean Hwaem mandala is based on Hwaem tantra. This differs from the Japanese mandala style, which is based on pure tantra sutra like the Daeil Sutra. Historically, Korean Buddhism has accumulated the ability over four steps: imitation Buddhism → doctrinal Buddhism → cultural Buddhism → practical Buddhism. Geographically, the sphere of Buddhism has expanded through continuous cultural exchange with India, Middle Asia, China, -and Japan. The concept of Dependent Origination has evidently influenced the socio cultural role of this faith. The social role of Buddhism today is increasingly apparent; hence, each country should enlarge the function of worldwide civilization through well-balanced globalization. Furthermore, Korea, China, and Japan must allow a variety of discussion in order to maintain close ties and cooperation in the future.

I. 韓国仏教の受容と定着

21世紀は、情報化社会、国際化社会、または文化の世紀と言われる。数多くの民族と国家が存立している21世紀に、いわゆる「地球村共生の時代」を追究するにあたって、仏教の役割が重要だと思われる。何故なら、競争の時代から協調の時代を迎え、また分析の時代から総合の時代を迎えて、仏教の核心理論である縁起法がその具体的かつ現実的な対案として登場する、と信じているからである。

今日に至るまで仏教が人類社会に及ぼした影響は

極めて大きい。しかし、仏教は地域や民族文化の個性によって各々異なる機能を果たしてきた感が少ない。仏教が、そのような役割を果たすことは、かつての時代においては必然であったかも知れない。しかし再考してみると、21世紀には仏教の普遍的思想をより深化、拡散させて、仏教によって世界化・国際化社会を導くべきであり、そこに今日の仏教の社会的な教化機能があると信じる。この発表では、韓国仏教が歴史的に如何なる社会的機能を果たして、他の文化との融合を如何に期しながら仏教思想の変化・発展があったのかについて考察する。

また、中国と日本などの東アジア国際関係の中で韓国仏教の位相を推し量り、今日の時点で韓・中・日三国が仏教的相生と縁起世界を共に繰り広げることに関与することを期待する。

韓国仏教は、中国仏教を経由して伝来した。今日に伝わる伝来当時の仏像等は、全てが中国様式をそのまま模倣していることが分かる。しかし、それはあくまでも外形的な模倣であって、内心までは中国仏教を理解したり信仰したりする段階にまでは至らなかった。

韓国の古代仏教書でもある『三国遺事』は、当時の信仰形態をよく伝えているが、それによると初期の仏教は、仏教伝来の以前から存在している各種の神話によって理解されたり信仰されたりしていた。これを通じて、文化の伝来過程を推察してみると、先ず外形の文化が受容され、続いて内容的な面が受容される事例をよく見出せるが、韓国仏教もこのような過程を辿ることになった。即ち、最初は寺院を築き、仏像を奉安し、僧侶に仏教儀礼を行わせる仏教に留まっていたが、次第にこのような外形的な仏教が持つ意味とは何かについての疑問が生じ、仏教教義を理解しようとする意欲が大きくなった。僧朗を始めとする円光(555～638)、慈蔵等の三国時代の僧侶たちが競って中国に渡り、新たな仏教思想を学んでくるようになり、それによって新たな仏教思想についての理解の基準が出来て、仏教を通じて中国文物との交流が始まることになった。更には、韓国文化という狭い世界から脱却してより広くて普遍的な世界観と文化意識を追究することになった。元曉(617～686)・義相(625～702)・円測(613～696)・慧超(704～787)のような高僧がその代表的な人物として数えられ、その他にも数多くの求法僧たちが中国や印度で水準の高い教学を求めるために、あらゆる苦行を顧みず努力していたことは、中国の各種の高僧伝がよく伝えてくれている。

一方、古代韓国社会はこのように受容した仏教を自分だけで享受せず、これを更に日本に伝え、日本が古代文化の土台を築くことに助力した。日本各地で百済という名称が多く使われているのがよく見受けられる。日本文化の中で百済文化の影響がそれ程大きかったのは誰でも容易に推し量れる。例えば、百済町、百済郡、百済駅、百済寺、百済神社、百済観音などの名称がよく見られる。これらの名称の共通点は、殆どが関西地域にあることである。この地

域には、古代社会から百済の移住民たちが多く定着しており、今に至るまでも百済文化の名残が残っているのである。大阪府枚方市で特別史跡に指定されている百済寺跡がある。百済寺は、百済王族の氏寺であって、寺の西側には百済王神社があった。伝わる話によると、百済王敬福は宮内卿兼河内守となつて、百済郡の土地に移住することになったと言う。よつて、氏神を奉る百済神社やその王族を保護するために百済寺が建てられることになったのである。このように、日本には百済滅亡以後、集団で移住して来た移住民たちが至る所で集団的に暮らしながら彼らの文化を残し、それが今日まで伝承されていることが分かる。一方、これとは異なつて、日本人たちの精神の中で自ら百済人の末裔とか、或は百済文化の伝統を自分たちが継承していると、強く信じているのみならず、それを誇らしく主張してきた事実を確認することができる。

II. 韓国仏教の大衆化

以上で見た新羅時代までの韓国仏教の展開過程を見ると、4世紀から6世紀までは中国仏教の模倣時期であり、7世紀から10世紀までは、中国から高い水準の仏教思想を受容して韓国仏教の体質を形成する時期であつた。ところで、ここで注目すべきなのは、当時の韓国仏教は仏教をより幅広く理解し、より様々な階層に広めることに努めていたことである。それは、まるで21世紀の今日の仏教界が当面することとも深く関わっていると考えられ、またこのような韓国仏教を今日の国際社会が再認識する必要があると考えるからである。

韓国仏教史における高麗時代(918～1392)の仏教がこのような性格を持っていたのである。即ち、新羅時代までの仏教が学問的・理論的仏教を展開させたのであれば、高麗仏教はそれを生活化してあらゆる分野で仏教文化を発展させたのである。今日に伝わる高麗蔵経の版本・高麗青瓷・高麗仏画等はその代表的な文化遺産として数えられる。その他にも高麗時代には、諸般の日常生活に至るまで仏教文化が深く染み込んでいたのは『高麗史』等の史書でよく伝わっている。しかし、このように高麗時代に仏教文化が大きく発展できた理由は、新羅時代に築かれていた仏教思想の基盤があつたからこそ可能であつた。一方、中国の宋・元との文化交流が、高麗人た

ちにより幅広い文化意識を持たせたことも非常に大きな影響があったと考えられる。

ここで、文化交流とは親善的な性格もあるが、相互に葛藤や対立をみせた時期にも文化発展が促進することになったことを忘れてはいけない。文化の発展は、社会的発展によって、常に新たな契機に遭遇しないと衰退するという特質を持っている。高麗時代の末期になると、新たな禅風を引き起こし、衰退しつつある仏教文化の発展的転機を作ろうとしたが、新興士大夫たちによって新たに受容された朱子の性理学（朱子学）の勢力に押され、仏教は衰退期を迎えることになる。それは、性理学が仏教思想と比べて優れた思想体系を持っていたからではなく、これを信奉する知識人階層が社会の指導層を形成していたためである。よって、高麗以後の朝鮮時代（1392～1897）の仏教は、知識人層からは疎外され、一般民衆層を対象とする仏教に変わっていく。即ち、学問的・教学中心の仏教から信仰的・祈祷中心の民衆仏教に変わらざるを得なかったのである。ここで深い教理思想の理解よりは読経・信仰儀礼等による祈祷仏教の信仰的基盤をより深く根付かせることができた。

一方で、朝鮮時代の仏教は無知な愚夫・愚婦らによる盲目的な迷信に近い信仰形態に過ぎないと、否定的な評価を下す人もいる。しかし、筆者は決して朝鮮時代の仏教がそのように評価されるものではないと考える。何故なら、宗教としての仏教は理論的な学問の世界に止まるのではなく、信仰心による強い実践行為にもっと大きな意味があると考えているからである。振り返ってみると、今日の仏教は、合理的・理論的仏教の側面だけにその価値を見出そうとしているところに問題があると考えられる。何故なら、実践を伴わない宗教的理論は、既に宗教としての意味を失っていると信じるからである。そうすると、韓国における朝鮮時代の仏教は、信心に基づいた仏教として基盤を固めていたといえる。従って、学問的には排撃された仏教であっても、信仰的には王室や士大夫層によっても仏教は信仰心を発揮することができた。そして、このような信仰心による朝鮮時代の仏教があったからこそ、4世紀以来継続して築いて来た仏教思想や仏教文化の遺産を今日にまで伝承することができたのである。

Ⅲ．東アジア仏教と韓国仏教の特徴

東アジア三国の仏教は、各々異なる思想と文化、伝統によって様々な形で展開された。印度仏教が思弁的・瞑想的であれば、中国仏教は分析的・理論的である反面、日本仏教は情緒的・実践的であるという。よく日本仏教の特色を宗派仏教に求める。ところが、宗派仏教としての性格は、中国でも見られる。即ち、各經典に対する教相判釈が発達したため、これを分析的・理論的だという。しかし、これによって、各經典の教相判釈による宗派の分派は可能にするが、中国仏教はそうではなかった。教相判釈とは、あくまでも学問的な対象であって、宗派を作るための手段ではなかった。しかし、日本仏教は各々異なる教義による実践的な方向を確立することによって宗派が生じるようになった。言うならば、教義の観念的な信仰体系のみに満足せず、それを形象化し、形象化した対象によって信仰観を確立して行く。念仏による往生、座禅による成仏、唱題による成仏、密儀による即身成仏等、このような修行の方法がはっきりとしており、そこで期待される結果もまた明らかである。従って、このような宗派仏教が情緒的な性格を持つのは当然である。しかし、このような形象的な意味を持っている宗派仏教が形式化しすぎると、滅多にその枠を脱することができなくなる。即ち、今日の仏教が葬礼式仏教という枠を脱せられないのはこれをよく説明してくれる。

先に説明した印度・中国・日本の仏教と比べて、韓国の仏教はどのように説明することができるのか。普通、仏教は印度で発生し、中国で発展し、韓国ではその完成をみることになり、日本ではその実践の普及に寄与したという。韓国仏教に完成の意味を付与することは、元曉の総和仏教に大きな原因がある。元曉は『十門和諍論』で仏教思想と教理の融和を披瀝した。単に雑多な宗派仏教的な要素をあまねく調和させるのではなく、様々な原理が一つに帰し、また多様に展開する根源的な相関関係を把握していたのである。このような元曉の総和仏教の思想は後世に伝わって、歴史的に韓国仏教は宗派仏教ではなく通仏教を展開していくものの、総和仏教としての機能的作用力は弱化・形式化されてしまう。やがて韓国仏教にも日本仏教の曼荼羅のような信仰様相を見出せるようになる。即ち、在来の土俗信仰及び宗派仏教的な諸要素を統一的な体系の中で受容し

ている仏画でこれをよく確認することができる。韓国の曼荼羅は、『華嚴經』による華嚴密教に基づいた「華嚴曼荼羅」という特徴を持っている。日本の曼荼羅が『大日經』等の純粋な密教經典に基づいていることとは異なる。韓国仏教は、華嚴曼荼羅の信仰体系によって様々な信仰様相を展開させたのである。更に様々な信仰様相に通じる信仰の原理を知っていた。言うならば、仏教の大衆化と共に宗派仏教の展開が可能であって、また実際にこのような様相が展開されたのである。9世紀の新羅下代以後の五教九山や禪教兩宗等の様々な宗派が活動していた。しかし、この宗派は日本仏教の宗派仏教とは異なる。韓国の宗派は、学派という意味が強く、その差異は教理の理解の差異、乃至は修行方法上の差異を表したことに過ぎないためである。

今日の韓国仏教は、歴史的に4世紀以後に模倣仏教→理論仏教→文化仏教→実践仏教という段階を経て今日にまでその力量を蓄積してきた。その一方で、空間的に見れば、遠くは印度・中央アジア等と、近くは中国・日本等と絶え間なく文化交流をしながら、仏教についての理解の幅を広げてきた。このような事実は、仏教が伝来した国であれば各々その事情を異にすることだと思われるが、結局のところ仏教に関する幅広い理解や対応の仕方の拡大だったと考えられる。それは、仏教思想の核心である縁起法が知らないうちに働いた結果だと信じられ、その結果、仏教の社会的教化機能を拡大してきたことだと考えられる。

21世紀を迎える今日の時点では、今まで国ごとに各々独自の仏教の社会的な教化機能を果たしてきたことを、これからは国際化・世界化という時代に相応しい世界的な教化機能へと拡充しなければならない。そのためには、宗派仏教的な性格から脱皮して総合的・普遍的な仏教思想に基づいた教化的機能を存分に発揮しなければならない。このような点で韓国と中国、日本の東アジア三国の緊密な紐帯と協力、そして未来志向的な関係のための様々な論議とその場が広げられることを期待する。